

令和 5 年 6 月 14 日現在

機関番号：32663

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K16697

研究課題名（和文）『楞伽經』第2章のサンスクリットテキスト校訂ならびに訳注、思想研究

研究課題名（英文）The Lankavatarasutra Chapter two: Translation, annotation, and study of its ideology

研究代表者

堀内 俊郎 (Horiuchi, Toshio)

東洋大学・文学部・教授

研究者番号：60600187

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）： インド中期の大乗経典である『楞伽經』は、唯識、中観の両学派から重視される重要な経典であるが、難解であり、また、サンスクリットテキストにも問題が多いことで知られていた。本研究では、サンスクリット写本の読み直しと、チベット語にのみ残る二つの注釈書の参照により、その第2章の文献研究と思想研究を行った。全体にわたるものではなかったが、その作業により、重要な写本のあぶり出しと、テキストの訂正や思想の解明を行うことができ、本分野について実質的な貢献を成しえた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

インド仏教文献の研究にはまずテキストの確定が必要となる。本研究では『楞伽經』という大乗経典のサンスクリットテキストの見直しを行い、今後の校訂において参照すべき重要なサンスクリット写本を確定することができたのが、学術的意義である。さらに、大乗経典はしばしばとらえどころがなく、難解である。そのなか、『楞伽經』に対するチベット語二注釈書の参照により、大乗仏教の教説の一端、たとえば七つの自性や識説や頓悟・漸悟の問題についてより深く解明できたというのが、社会的意義である。

研究成果の概要（英文）： The Lankavatarasutra, a mid-Indian Mahayana scripture, is an important scripture emphasized by both the Yogacara and Madhyamaka schools of thought, but it is known to be difficult to understand, and its Sanskrit text is also known to have many problems. In this study, we conducted a philological and ideological study of its second chapter by rereading Sanskrit manuscripts and referring to two commentaries that survive only in Tibetan. Although not an exhaustive study, this work has made a substantial contribution to the field by uncovering important manuscripts and providing textual corrections and clarification of ideas.

研究分野：中国哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：『楞伽經』 サンスクリット写本 智吉祥賢 智金剛 貝葉写本 経典注釈書

#### 1. 研究開始当初の背景

インド中期大乘経典の一つである『楞伽經』については、南条による4つの写本をもとにした校訂本が1923年に刊行されて以来、サンスクリット写本に基づいた全体の再校訂テキストは存在しない。そのようななか、高崎1989は17の写本に基づいて第6章の校訂本を作成したが、その後、章単位で同様の試みをする研究は存在しなかった。また、チベット語としてのみ残る二つの注釈書もインド・チベットにおける経典解釈の例を示すものとして重要であったが、未だ全訳も存在せず、その全貌が明らかにされていないままであった。さらに、南条本の問題点は扱う写本の数の少なさとともに、最初の試みとして不可避なことであるが、写本の読みの不正確さであったことが、筆者の調査によって明らかになっていた。

#### 2. 研究の目的

上記の研究背景のもと、本研究の目的は、『楞伽經』第2章(「三万六千一切法集品」)について、写本に基づくサンスクリットテキストの校訂、ならびに訳注を行うことであった。とともにまた、難解とされる本『楞伽經』の読解に際し、チベット語としてのみ残る二つの注釈書(ジュニャーナシュリーパドラとジュニャーナヴァジュラによる)も参照することにより、同経の重要概念を明らかにすることも研究目的であった。

#### 3. 研究の方法

研究の方法は文献研究に基づく思想研究である。サンスクリットについては、先行研究によって、最重要で、それぞれの系統の特徴を示すとされた4つの写本、ならびに唯一の貝葉(palm leaf)写本1本の合計5本に絞って校訂を行う。さらに、本経は「論的経」といわれるように、経典でありながら論書性格も備え、サーンキヤなど仏教以外の学派にも言及し、批判している。そこで、訳注に際しては、本経の注釈(チベット語訳として2つの詳細な注釈が残る)とともに、それらの仏教以外の学派の文献や研究動向も視野に入れつつ、当時のインド思想界の中での本経の位置づけを明確にしつつ訳注と思想研究も行う。

#### 4. 研究成果

2016年に研究を開始してより、研究の進展や他の研究成果により、当初の計画を多少修正せざるを得なくなり、必ずしも当初の計画通りに成果がもたらされたわけではなかったものの、着実な成果をあげることができた。

すなわち、当初は最古で唯一の貝葉写本をベースに校訂本を作成しようとしていたが、同写本が必ずしも最良の写本ではなかったことが明らかとなった。また、その他4つも必ずしも良い写本とはいえず、より多くの写本を検討する必要があることが判明した。ゆえに10数本の写本を集めて徐々に検討していった。そのようななか、Schmithausen2020により、『楞伽經』の第8章に関して、サンスクリット諸写本の年代や重要な写本についての確かな見解が提示された。本研究でも、研究課題である第2章という別の章に関して同様の結論に到達し、さらにはRy写本が後代のいくつかの写本の元となったことも解明した。これにより、30ほどもある『楞伽經』のサンスクリット写本のうちで重要な5つほどに確定されたことになる。これらは問題の多い『楞伽經』のサンスクリットテキスト確定のための今後の礎となると確信している。また、当初の予期の通り、チベット語訳とチベット2注釈書の重要性も確認することができた。それらの研究成果は日・英による学会発表や論文発表にて公表している。そのなかの重要な成果について以下に記す。

「Critical Textual～」論文では、20のサンスクリット写本を吟味し、その系統や重要性を検討した。そのなか、Ry写本が、後代のC9、N13、N14、T3、T4、T5写本のもとになっていることを、後者に共有されているユニークな異読をベースにして、論じた。これにより、後者の6写本は実質的に参照する必要がないことが明らかとなった。また、智吉祥賢の注釈を参照することにより、どのサンスクリット写本でも不明瞭あるいは不正確であった箇所が一か所訂正できることが判明した。他の写本についてもその重要性、非重要性を吟味した。この結果は、『楞伽經』の他の章を検討したSchmithausen2020での検討結果と期せずしてほぼ一致することとなった。

「『楞伽經』「羅婆那王勸請品」的文本批判論評」論文は、中国語での発表の概要である。上記の写本に基けば、第一章のわずか13の偈頌のなかの14もの箇所に対して修正を加えることができることを示したもの。

「如是我聞～」論文では、従来着目されていなかった『楞伽經』の智金剛注の冒頭部の議論を取り上げ、そこで論じられている結集者は誰か、「如是我聞」の意味、言語による説法の意味、経典の結集の由来などというテーマを解明した。

On the Beginning論文では、以下のことを明らかにした。

10章から成る『楞伽經』のうち本体部分といえる第2章から第8章は、世尊と大慧との対話で構成されている。そのうち第2章の冒頭部は以下のような構成となっている。大慧讚仏 vv。

1-8 ;〔偈問と偈答〕大慧請問 v。9 世尊応諾 vv。10-11 ;百八問 vv。12-59 - 偈答(百八答)vv。60-98 ;〔百八句〕;〔正宗分〕。そのうち、百八問と百八答は、一読してわかるように、奇妙な対話となっている。大慧の質問に対して世尊は直接的に回答をすることなく、順序を変えて大慧の質問を繰り返しているのみだからである。しかし、当該箇所を経本体との関連を念頭に検討したところ、以下のような結論を得た。

世尊の回答のうち 72-79 偈は独特の位置を占め、大慧が聞くべきであった質問と位置付けられる。そして、それは極微に関するもので、『十地経』第八地の記述との関連が予想される。そして、大慧の百八問に対する世尊によるそれ以外の回答(62-71、80-96)は、どうしてそういうことを聞くのかという、たしなめであると理解される。一方、世尊が回答していない部分は、経本体で回答されていることがある。「偈頌品」に対応がみられることすらある。ゆえに、本箇所の意義は従来考えられていたように意味のない質問とその繰り返しではなく、一定程度の構想をもって構成されたものとみられる。

なお、『楞伽経』の注釈者である智金剛は、世尊は62偈から大慧の質問を繰り返したのち、70c偈で、それらは唯心であるという回答を与えていると解釈している。

では、世尊によって偈答でもって回答(繰り返され)され、質問すべきではないとたしなめられた質問の意義は何か。智金剛によれば、大慧の質問の意義は、人々に、主に決択されるべき意味は、一切を包摂する心の法性である真如であると理解させることにある。これは経全体の基調からいって、穏当な解釈であると思われる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Horiuchi Toshio	4. 巻 3
2. 論文標題 Critical Textual Evaluation of Two Paragraphs of the LaGkAvatArasUtra, Chapter 2 (Nanjo 55.2-58.2): Focusing on the Relationship of Manuscripts	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin of the International Institute for Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 69-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 堀内俊郎	4. 巻 9
2. 論文標題 「如是我聞」と結集者をめぐる論争 『般若心経』アティシヤ注と『楞伽経』智金剛注当該箇所 の校訂テキストと訳注一	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 151-175
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34428/00011567	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Horiuchi Toshio	4. 巻 67
2. 論文標題 On the Beginning Part of the Lankavatasra Chapter II: Re-examination of the Dialog between Bhagavat and Mahamati	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Indian and Buddhist Studies	6. 最初と最後の頁 (58)-(63)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4259/ibk.67.3_1100	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 Toshio Horiuchi	4. 巻 6
2. 論文標題 The Seven Bhavasvabhavas and Seven Paramarthas in the Lankavatasra: Methodological Remarks on the New Edition of Chapter II of the Lankavatasra	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of International Philosophy	6. 最初と最後の頁 65-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34428/00008854	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Horiuchi Toshio	4. 巻 13
2. 論文標題 Disputed Emptiness: Vimalamitra's MAdhyamika Interpretation of the Heart Sutra in the Light of His Criticism on Other Schools	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Religions	6. 最初と最後の頁 1067 ~ 1067
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/rel13111067	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Horiuchi Toshio	4. 巻 14
2. 論文標題 Madhyamaka vs. YogAcAra: A Previously Unknown Dispute in Vimalamitra's Commentary on the Heart Sutra	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Religions	6. 最初と最後の頁 327 ~ 327
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/rel14030327	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内俊郎	4. 巻 60
2. 論文標題 菩薩が目指すもの ヴィマラミトラの『般若心経注』後半部より	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東洋学研究	6. 最初と最後の頁 243-266
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内俊郎	4. 巻 71-1
2. 論文標題 ヴィマラミトラ著『般若心経注』、『七百頌般若注』の引用文献 チベット語訳者の問題に関連して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 (340)-(335)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 堀内俊郎	4. 巻 -
2. 論文標題 《楞伽經》「羅婆那王勸請品」の文本批判論評	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東方唯識学研究専門論文集(2022)	6. 最初と最後の頁 190-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 堀内俊郎
2. 発表標題 『楞伽經』における現識と分別事識
3. 学会等名 パウッダコーシャ研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀内俊郎
2. 発表標題 ヴィマラミトラ・アティシャvsディグナーガ 『般若心経注』における結集者の認識根拠性をめぐる議論
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 堀内俊郎
2. 発表標題 『楞伽經』第2章冒頭部再考 テキスト上の問題を中心に
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HORIUCHI Toshio
2. 発表標題 Logical Aspects in the LaGkaavataarasutra: Question by Mahaamati and Answer by the Buddha in Ch II Reconsidered
3. 学会等名 International Workshop on Bhaaviveka and Buddhist Logic, A special section of the International Conference on Hetuvidyaa / Yinming (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Toshio Horiuchi
2. 発表標題 The Seven Bhavasvabhavas and Seven Paramarthas in the Lankavatarasutra: Methodological Remarks on the New Edition of Chapter II of the Lankavatarasutra
3. 学会等名 Khyentse Center Lecture Series (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Toshio Horiuchi
2. 発表標題 「羅婆那王勸請品」の文本批判論評
3. 学会等名 第六屆東方唯識學專業委員會年會 (招待講演) (國際學會)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 堀内俊郎
2. 発表標題 ヴィマラミトラ著『般若心経注』、『七百頌般若注』の引用文献 チベット語訳者の問題に関連して
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	ハンブルク大学			